

## 再発見 Penalty Kick

Penalty Kick (罰としてのキック) の Law にはラグビーという競技の罰についての基本理想が一貫した流れを知ることが出来ます。罰になることはしないように心がけ、罰を受けることが少ないように努めることは人間として生きる上での非常に大切なことです。そのことはスポーツを楽しむときにも同じであってスポーツマンにとって非常に大切なことです。神様でも聖人君子でもない普通の人間のすることですからたまには過ちがあっても許されるとしても、1つのゲームで罰としてのキックが両方で10以上なるようなことはあってはならないことでスポーツを enjoy しているとは言えません。反則数は平素における練習で罰を少なくするという意識と努力の不足の結果を示しているもので、恥ずかしいことです。反則ゼロであることを目標にしている高校チームがあると聞いていますが、皆見習わなくてはなりません。残念ながら現在のラグビー界全体に意識が低いことを認めなくてはなりません。そのためにはペナルティキックについての基本理念を考察する必要があります。

「第11条 競技方法 Mode of Play」は全て may (してもよい、出来る) で表現されています。罰は少ない方がよいという理念の源流に流れている思想であることを忘れてはなりません。

昔々、現在のようにルールが整備されていなかった時代の話です。ゲーム前に戦い方について両チームが話し合って取り決めて行いました。お互いに勝つために必死になっている中に行き過ぎや想定外の事など色々問題が起きます。乱暴行為や取り決め違反など多種多様な問題が起こればアピールがなされその都度キャプテンが話し合うことになります。

少しでもスムーズに行くようにとアンパイヤが導入されました。更に問題が繰り返され議論の結果レフリーが導入されました。この間の経緯については、本コラムのバックナンバーを参照して下さい。

問題の中にはプレーヤーの小さなミスによるものや申し合せに反するいくつかの場合は話し合いでスクラムから再開するケースが多かったのですが、簡単に許されないものはキャプテンが話し合いの結果、罰として反則のなかったチームにフリーキックを与えて再開するケースもありました。

1882年の記述にラグビー精神に関する重要なものがあります。条機に陽にアピールがあり話し合いが行われスクラムかフリーキックで再開されるという試合の流れが出来たのですが基本的には「スポーツマンシップに基づく相互の信頼と友情で問題は解決されゲームはうまくいった」と書かれています。

THE HISTORY OF THE LAWS OF RUGBY FOOTBALL の緒言には

In 1855 one writer on football in Scotland stated, "It was not a bad game ; the greatest beauty of it was that there were no rules"

rule が無くてもプレーヤー1人1人がスポーツマンシップをしっかりとプレーすればゲームはうまくいくのです。

他方反則に対して厳しく罰するという意見もありました。

the R.U. appear to have been averse to introduce jurisdiction,

とあります。話し合いがうまくまとまらなかったり、後にしこりが残ったりとするのを防ぐために判定権を持った人を導入すべきという提言もなされています。

問題解決方法としてのフリーキックが終えなるティキック (罰としてのキック) に転化していく過程に入ります。

free Kick は fair catch に対して与えられたもので1846年に相手キックをチャージすることについて "charging is fair" チャージしてもよいという記述があります。

1882年頃には話し合いの元にオフサイドに対する罰としてのキックが行われるようになりました。free kick by way of penalty" が広まりました。罰としてのキックはドロップキックでもパントでもよく、得点にはなりませんでした。

得点と消波について整理考察をしましょう。

1866 obtaining 2 goals  
2 ゴールとった方が勝ち

- 1874 a majority of goals  
ゴールが多い方が勝ち
- 1877 トライは点なし、goal が得点となる  
点数による方法が徐々に取り入れられる
- 1886 ゴール3点 トライ1点  
点数によって勝敗を決める形式が一般的  
ペナルティキックによる得点はゼロ
- 1888 “referred to what was really a penalty” と表記もあり penalty kick が一般的になりました。  
キックは与えられたゲームの誰かが蹴ってもよく、またドロップキックとパントに加えてプレースキックでも行えるようになりました。

フットボールはボールを相手のゴールへ蹴り込むことによって得点するものであり、罰としてのキックであってもゴールへ蹴り込むという点では同じで、相手ゴール近くまで攻め込んでそこで罰としてのキック権を与えられ、ゴールすることに対し点を与えることは妥当なことだという考え方がみられます。

1889年には penalty kick に得点を与えるべきという意見が強くなりその動きが見られるようになりました。

そして、

1982 トライ : 2点 ゴール:3点 計5点  
ペナルティキック:3点  
ドロップゴール:4点

これが基本得点となりました。  
ペナルティゴールに点数が与えられることが確定しました。

1894 トライ : 3点 ゴール:2点 計5点  
ペナルティキック:3点  
ドロップゴール:4点

トライを重視する価値観に変化の流れが見られます。  
ドロップゴールの4点はフットボール本来のゴールの感覚によるものです。

1926 定義に加えられるようになったということは確定と基本的な重要項目として認定されたという2つの面があります。

1894年の点数が基本形と言われるものです。現在はトライ重視に加えて penalty kick のよる得点で勝敗が左右されないようにという配慮からトライが5点に決められました。

キャプテンはゲーム中にレフリーの判断に対し不服のジェスチャーや質問をするだけではありません。信念を持って質問し、レフリーの研究欲を引き出すことが求められています。それは平素の練習においてちむの先頭に立ってルールを精神を生かす練習（方法）を実行して始めて出来ることです。

レフリーは任されることの重大さを今一度深く認識し、プレーと条文の文字を参照するだけでなくルールを精神を生かすという信念のもとに笛を吹かなければなりません。よいゲーム創造へのビジョンがなくては不可能です。それはプレーヤーにも観客にも必ず理解されるものです。

ゲームを楽しむオーラの全く感じられないレフリーから楽しいゲームは生まれません。